

## Contents

- ❖ 大学図書館—その“変わらぬ使命”と“変わりゆく業務”—
- ❖ 『大東文化大学百年史』下巻刊行を目前にして
- ❖ 大東アーカイブス 第28回 企画展  
「戦後80年 戦時下に学んだ大東生・桂米朝」
- ❖ 百年史編纂の現場から
- ❖ 大東アーカイブス活動記録

### 求人票と学生(1975年9月)

1975(昭和50)年は第一次オイルショックの余波を受けて企業の倒産が相次いだ年であり、大卒者の就職活動にも多大な影響を及ぼしました。同年9月になっても就職課前に貼り出された大量の求人票を熱心に見る学生たちの姿がありました。男子学生の就職率は高度経済成長期を経た60年代前半に90%前後まで上昇していましたが、70年代は緩やかに下降し、75年は77.5%となりました。女子学生の就職率は60年代半ばには70%を越えましたが、オイルショック前後の時期は50%台まで下がりました。その後、80年代末のバブル景気を迎える頃には90%前後まで一時的に上昇しますが、いわゆる就職氷河期には再び50%台まで落ち込むなど過酷な就職状況となりました。

Daito Archives  
Newsletter

大東文化歴史資料館  
ニュースレター  
エクス・オリエンテ

Vol.

39

*Ex Oriente*

# 大学図書館

## —その“変わらぬ使命”と“変わりゆく業務”—

大東文化大学図書館長

宮瀧交二（文学部歴史文化学科教授）



大相撲の世界では、大の里閔が第75代目の横綱となって活躍していますが、間もなく刊行される『大東文化大学百年史』下巻に掲載される予定の「大東文化大学歴代役職者一覧」のゲラ刷りを拝見すると、どうやら私は、昭和34（1959）年4月1日に就任され昭和36（1961）年3月末まで初代の図書館長を兼務された第2代・平島敏夫学長から数えて、第41・42代目の図書館長ということになるようです。埼玉県立博物館ほかで16年間、学芸員として勤務した後、御縁があって博物館学の教員として本学に採用されたのですが、まさか博物館（アーカイブス）ならまだしも、図書館の仕事をお手伝いするようになるとは、夢にも思いませんでした。ただし、今年度で、本学に採用していただいてから21年目を迎えています。本学の図書館をよく利用する教員であるという自負は、ずっと抱いていたところです。

さて、大学図書館には、いつの時代にも変わらぬ使命があります。言うまでもありませんが、大学図書館は、学生たちの学修生活、また、教職員にとってもその調査・研究・教育活動に不可欠な書籍・雑誌を収集・購入・保管（保存・管理）し、利用者に提供する「場所」というよりも「機関」であり、さらに近年では利用者それぞれの多様な要望にお応えするために、様々な電子リソース（電子書籍、電子ジャーナル、データベース等）を整備・充実することも新たな業務となっています。つまり、学生・教職員それぞれの要望に応えるという何時の時代にも変わらぬ使命を果たすと同時に、その多様化する要望に合わせて業務の内容を絶えず見直し、少しずつ変身を遂げているというのが、大学図書館の現状ではないでしょうか。

現在、このように大学図書館の運営形態や業務内容は日々刻々と変化しており、誤解を恐れずに言うならば、本学図書館をはじめとする各大学の図書館は、数多くの課題を抱えながらも、日々の業務を遂行して行かなければならない（この長期休館が許されないという点は、地方自治体が設置している公共図書館との大きな違いの一つです）という「ゴールの見えない過渡期」に入っていると述べても過言ではないと思われます。

かつては、前掲のように書籍と雑誌を収集し、これを利用者が閲覧出来るように装備し、貸出等に対応することが、大学図書館でも主たる業務でした。しかしながら、現在は、利用者自身による蔵書の検索や、その貸出・返却等を一括して把握するためのコンピューターシステムの構築・管

理・更新と、それにかかる職員体制の確立が業務の大きな位置を占め、もちろんそのための経費も年々増大しています。そして当然のことながら、こうした業務の遂行に向けての図書館職員のスキルアップも欠かせないため、本学図書館も参加する私立大学図書館協会等が主催する様々な研修には、職員が積極的に参加しています。このような大学図書館を取り巻く諸環境の変化に後れをとらないよう、私たちは今後も様々な諸課題に正面から向き合っていかなければなりません。

既に御存知の方も多いと思いますが、本学の図書館は、両キャンパスの図書館、すなわち板橋図書館と東松山図書館を併せて、2024年度末現在166万915冊の書籍と、1万1223タイトルの雑誌を所蔵し、両図書館併せて年間延べ22万人を超える利用者の便に供しています。そして、試算したところ、両図書館の書庫の空きスペースは、10年以内に飽和状態に達する見込みです。学園の長期計画の中に、この本学図書館の書庫の不足解消問題とその対策を位置付けることが、私の館長2期目の大きな課題であると認識しています。

ところで、かつて、1300万冊以上の蔵書を誇る、イギリス、オクスフォード大学のボドリアン図書館を訪ねた際に驚いたのは、その規模や蔵書数はもとより、さりげなく歴史と伝統を体現している重厚な建築や、会議室や食堂といった館内の諸施設が身にまとっている落ち着いた風格（内装や調度品への拘り）でした。100年を超える本学の図書館も、前掲のような新たな業務形態の確立のみならず、利用者の皆様が、自然と伝統校の図書館に足を運んでいることの安心感や満足感を抱きながら本の頁をめくることが出来るような環境の創出にも取り組んでみたいと思っています。どうぞ、今後とも大東文化大学図書館への、より一層の御理解と御支援を宜しくお願いいたします。



「オクスフォード大学・ボドリアン図書館群の一つラドクリフ・カメラ」  
(2012年8月筆者撮影)

# 『大東文化大学百年史』 下巻刊行を目前にして

百年史編纂委員会委員長

中村宗悦（歴史資料館館長・経済学部教授）

百年史編纂委員会では、これまで進めてきた『大東文化大学百年史』全三巻編纂事業の最終段階として、下巻（2026年3月末刊行予定）の編集作業がいよいよ大詰めを迎えています。すでに上巻・中巻は刊行を終え、学内外から多くの反響とご意見を頂戴してきました。あらためて、資料提供や聞き取り調査など、さまざまなかたちでご協力くださった関係各位に、心より御礼申し上げます。

下巻は、1980年代末から2023年までのおよそ30年間を対象とし、昭和末期・平成期・令和初期という、本学にとっても、また社会全体にとっても大きな転換が重なった時代を扱います。この期間は、冷戦終結に始まる国際秩序の変動、国内における長期経済停滞、度重なる自然災害、そして新型コロナウイルス感染症の世界的流行など、「危機」が日常化した時代でもありました。

こうした内外環境の変化は、大学という組織に対しても、教育・研究・経営のあらゆる側面で再定義を迫るものでした。18歳人口の減少に象徴される少子化の進行は、日本の高等教育史において初めて本格的に経験する局面であり、本学もまた、そのなかで自らの位置づけと役割を問い直してきました。

下巻では、この時期を二つの章に分けて構成しています。第8章「変化し続ける大学」では、1991年の大学設置基準大綱化以降の改革を起点として、自己点検・評価制度の導入、カリキュラム改革、コンプライアンス体制の整備など、教育・研究基盤の再構築過程を中心に叙述します。あわせて、学部・学科・研究科の新設や再編、板橋キャンパス整備事業、70周年・80周年記念事業など、本学の制度的・物理的な発展の歩みも詳述しています。

第9章「大東文化大学の現在と未来」では、2000年代以降の中長期計画策定の過程、大学ガバナンスをめぐる取り組み、90周年記念事業や東松山キャンパス整備事業の完了までの経緯を整理するとともに、2019年度末以降の新型コロナウイルス感染症への対応を、後世に残すべき大学史の一断面として記録しています。さらに最終節では、百年史三巻の編纂を通じて見えてきた本学の特質と課題を整理し、今後への展望を簡潔にまとめる予定です。

下巻は、とりわけ現在の教職員・学生・卒業生の記憶とも重なる時代を扱うため、個人情報や機微情報の取扱いには最大限の注意を払い、できる限り客観的・中立的な記述となるよう編

集を進めてきました。同時に、大学史を単なる出来事の羅列ではなく、組織としての選択と試行錯誤の記録として描くことを意識しています。

繰り返しとなりますが、2026年3月末の刊行を予定している『大東文化大学百年史』下巻は、本学の現在につながる約30年間の歩みを体系的に整理し、制度改革や教育研究の変遷、キャンパス整備、周年事業、さらには新型コロナウイルス感染症への対応までを含めて記録した一冊となります。上巻・中巻とあわせてお読みいただくことで、本学百年の歴史を通時的に把握できる構成となっています。刊行形態や配布方法、電子版の公開等の詳細につきましては、決まり次第あらためて大学公式サイト等を通じてご案内いたしますので、ぜひご期待ください。

あわせてご紹介しておきたいのが、『大東文化大学史研究紀要』最新号が間もなく刊行される予定であるという点です。最新号には、前号に引き続き、太田元学長および内藤元学長へのインタビュー記事が掲載される予定であり、それぞれの在任期における大学運営の理念や意思決定の背景、当時直面していた課題認識などが、当事者の言葉として語られています。これらのインタビューは、制度や出来事を客観的に整理した百年史本文とは異なる角度から、本学の近年の歴史を立体的に理解するための貴重な一次的記録と言えるでしょう。百年史下巻とあわせてお読みいただくことで、組織としての歩みと、その背後にあった思考や判断の過程とを往還しながら、本学の歴史をより深く捉えていただけるものと思います。

なお、大東文化大学史研究紀要編集委員会では『大東文化大学史研究紀要』掲載の論文等を募集しています。大学史に関するご研究の発表、資料のご紹介などございましたら是非奮ってご投稿をいただきますよう、お願い申し上げます。ご投稿に関するご質問などに関しましては大東文化歴史資料館事務担当までお知らせください。

大東文化歴史資料館事務室

電話 / 03-5399-7403 FAX / 03-5399-7391

archives@ic.daito.ac.jp

## 大東アーカイブス 第28回 企画展

# 「戦後80年

# 戦時下に学んだ大東生・桂米朝」

展示期間 2025年11月1日(土)～2026年3月31日(火)

(開室時間 毎週月～土曜日 9:00～17:00)

※日曜・祝祭日、入学試験期間中および大学の休校日に準じて閉室します。

展示場所 大東文化歴史資料館 展示室(板橋校舎2号館1階)

戦後80年を迎えた2025(令和7)年は、上方落語の巨匠・三代目桂米朝の生誕100年、没後10年に当たりました。これを記念し、大東文化歴史資料館(大東アーカイブス)では、第28回企画展「戦後80年 戦時下に学んだ大東生・桂米朝」を開催しました。

桂米朝は1996(平成8)年に重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定され、2009(平成21)年には文化勲章を受章した演芸界史上初の落語家として知られますが、実は戦時中の大東文化学院で学んだ経歴を有しており、本学の誇る「同窓生」のひとりでもあります。

桂米朝(本名:中川清)が大東文化学院へ進学したのは1943(昭和18)年4月のことでした。戦時下のことであり、同年末には出陣学徒壮行会が行われるなど、戦況は悪化の一途を辿っていました。

当時の大東文化学院の校地は池袋にありましたが、大東生は池袋駅ではなく目白駅からの通学が推奨されていました。そのためか、在学時の清の下宿先も目白にあり、下宿から巣鴨方面に抜けた先の大塚には生涯の師となる正岡容(まさおかいる)が当時住んでいました。

大東文化学院への進学、同級生たちとの充実した学生生活、一流の教授たちによる高度な講義、真摯に漢学に向き合った日々、正岡容との運命的な出会い。何より、大好きな落語を聞くための寄席通いが思う存分できました。戦時下の混乱のなかにおいても、かけがえのない青春の日々を過ごしていたある日、軍への応召を経て、清の人生は大きく変わっていくことになります。

後に不世出の落語家・三代目桂米朝となる、古典芸能・上方落語をこよなく愛した一人の青年・中川清が大東文化学院に学んでいたことを記憶するとともに、本企画展を通じ、戦時下の高等教育機関の様相を歴史の教訓として見つめることとなれば幸いです。

### 大東文化学院への進学

中川清は中国大連に生まれ、5歳のころに父親の生家があった

姫路へ帰郷、小学生のころ父に連れられて大阪の寄席へ通ったことをきっかけに、落語好きの少年へと成長しました。

旧制中学の名門・兵庫県立姫路中学に在学中だった清はある日、親しい先輩から大東文化学院という学校の話を知りました。大東文化学院はもともと漢学の旧制専門学校でしたが、そのころは漢学専修である第一部・修身漢文科のほか、第二部・国語漢文科、第三部・東亜政経科からなる三部制へと移行していました。数学は苦手、しかし国語と漢文なら大得意、漢学には大いに興味があった清は、大東文化学院本科の第二部・国語漢文科へと進学を決めました。古典芸能を心ゆくまで堪能したいという念願叶って上京した後は、仕送りを切り詰めては上野の鈴木本演芸場を皮切りに東京に数多くあった寄席、講釈場、見世物小屋など次々制覇していきました。たまたま同級生にも同等の落語好きがおり、同志として連れ立っての寄席通いは、清にとって束の間の青春の日々でした。生涯の師として仰ぐ正岡容と偶然出会ったのも、大塚鈴木本演芸場へむかう途中のことでした。異能の作家で寄席文化研究者として知られる正岡は、自宅に訪ねてきた清をすぐに気に入り、正岡一門の一番弟子としました。後に清が上方で落語家の道へ進むことを後押ししたのも、正岡から届いた手紙でした。この時の手紙を清は、「師の声は天の声であった」と表現しています。

さて、清が大東文化学院へ入学したのは1943(昭和18)年4月のこと、本科20期生でした。国語漢文科の在籍でしたが授業の大半は漢文で、一流の教授たちによって高度な漢学講義が展開される、授業についていくためにはかなりの知識と勉強が必要な毎日でした。

清は米朝となってから、大東文化時代の何人かの恩師についての思い出を書き残したり、対談で語ったりしています。入学直後の授業は特に記憶に残っており、加藤梅四郎の『孝経』、鈴木由次郎の『十八史略』、猪口篤志の『文章軌範』などがあったけれども、なかでも笠井南邨の『唐詩選』は「強烈な記憶」として残っており、思い出深いと回想しています。記憶にあるのはいずれも、大東文化学院高等科出身の教授たちによる漢学の授業でした。特に、敗戦後も笠井南邨教授との交流は長く続い



ており、手紙や追悼文などいくつかの資料が米朝宅に残されています。

### 応召と敗戦

学校教練（軍事教練）は、1925（大正14）年の「陸軍現役将校学校配属令」により、中学校以上の学校で事実上義務化されるようになりました。清が在学した戦時下の大東文化学院で

も日常的に軍事教練が行われ、茨城県波崎町の利根川河口に近い波崎廠舎を基地として軍事演習も行われました。一方、1943（昭和18）年10月21日には明治神宮外苑競技場にて「出陣学徒壮行会」が開催されました。以降、大学や専門学校など高等教育機関に所属している文科系かつ20歳以上となった学生たちは徴兵猶予が解かれ、次々と戦地へと送られていきました。

翌1944（昭和19）年10月には徴兵適齢が20歳から19歳へと繰り下げとなり、同年11月の誕生日で19歳となった清のもとにもすぐに召集令状が届きました。すでに大東文化学院の授業はほとんど開講されておらず、学徒動員によって軍需工場あるいは農村地に赴く毎日でした。それでも清は合間をぬって師匠である正岡宅を訪ねたり、寄席に通ったりしていました。入隊通知が届くとまずはすぐに正岡に挨拶に行き、その後は年末の東京と大阪とで思う存分、芝居と寄席を味わいました。「もうこれで思い残すことはない」、そう満足するまで可能な限り舞台を見続けたといいます。もっと落語が見たい、ただその一心で過ごす毎日でした。

姫路10師団39連隊に配属となった清は、姫路北東の演習場にある兵舎で軍事訓練に参加しました。大砲を担ぐのが主たる仕事でしたが、清の身体検査は第二乙種であり、体力的にもあきらかに非力でした。ただ、視力が2.0だったことから照準手候補としての仕事に割り当てられました。それもつかの間、入隊から2ヶ月後には次第に体調に異変を感じるようになり、急性腎臓炎と診断され緊急入院、そのまま姫路の陸軍病院で敗戦を迎えました。「私には軍隊の話をする資格はない」というのは米朝の残した有名な言葉ですが、2ヶ月足らずの軍隊経験であったことに由来しています。

### 大東文化大学での講演 大学生たちとの交流

敗戦後、四代目桂米團治に弟子入りし、三代目桂米朝として大成した後も、清は“大東文化”のことは決して忘れませんでした。むしろ、連絡や依頼があれば積極的に交流を持ちました。同期の仲間が50年ぶりに訪ねてくれば、一緒に酒を酌み交わし、当時のままに語り合いました。

特に思い出深いイベントは、1989（平成元）年6月3日に桂米朝が大東文化大学で行った「文学部特別講義 話芸について」でした。特別講義の

後に届いた学生たちからの手紙を米朝は生涯大切に保管していました。平成の時代を過ごす大東生を見て、自分の知っている大東文化とは全く違うマンモス大学になったと感想を述べた米朝ですが、この特別講義をきっかけとして、落語へ興味関心を持った大東生も多かったようです。

（歴史資料館運営委員・専任研究員 浅沼薫奈）

# News

## 百年史編纂の現場から

大東文化大学百年史編纂委員会副委員長

**谷本 宗生**(歴史資料館運営委員・専任研究員)

今回は、自身が担当執筆した『大東文化大学百年史』中巻の第5章「大東文化大学の振興と運営方針の策定」の第1節「池袋校舎から板橋校舎への移転と創立40周年記念事業」の概要について紹介した。今回も引き続き、第5章の第2節「新学部(文学部・経済学部)の設立と教育課程」の要点、そのなかでも、とくに「1961年の学部増設認可申請をめぐって」および「経済学部経営学部の増設と経済学部の入学定員の変更」について紹介したいと思う。

### 1961年の学部増設認可申請をめぐって

1961(昭和36)年1月の理事会で、堀田太郎常任理事から前年9月に提出した大学学部の増設(文学部・経済学部)認可申請に関し、大学設置審議会などの審査状況からみて設置認可は至難で不認可となるであろうとし、いったんこの認可申請書を取り下げ、諸条件を整えて1961年9月に再提出を行いたいと報告した。堀田常任理事の説明では、「文学部の教員資格審査では全員合格判定というきわめてよい結果をみたのでありますが、経済学部においてはその資格審査がことのほか厳しい」とし、さらに「板橋校舎の建築工事の進行状況につき、竣工期日(書類上5月30日)の点で若干問題になった(3月31日竣工でなければならない)」という申請上の問題点についても詳しく言及されたのであった。

実は、文学部・経済学部の設置認可申請の再提出をめぐる経緯については、さらなる事情があったことが今回の百年史編纂の調査ではじめて明らかになったのである。それは、本学と協議を重ねた文部省担当官から、関係施設や教員組織の条件整備については、「十分検討充実させ、きたるべき今年9月の申請に万全を期されることがもっとも賢明な方法」であり、また基準をみたした文学部だけを先に設置させる可能性についても、「全体の規模があまりにも絶対的基準からみて不足している」ゆえ、「申請書を取り下げ再申請したほうがよい」という有益な助言をうけていたのであった。

この点については、実際、1961年9月の文部省へ提出した「大東文化大学学部増設認可申請書」でも、「元来系統の異なつた分野の学問が同じ学部のなかにおいて授業するということはまったく非合理的なことであり、これを分離することによつてそれぞれの学問体系を整えその特色が十分発揮できだいに社会のため貢献し得る優秀な学生を養成することができる」として、「さらに拡張充実して現在の文政学部を分離し、文学部と経済

学部を設置したい」という学部増設の理由を明確に示している。またこの申請書に記されていた「将来の計画」では、学部学科の組織充実にあたり、「年次ごとに専任教員数を増加し、併せて学科目・講座内容等の充実」をはかりながら、将来的には「文学部に社会学科、経済学部に経営学部の増設」していく方向も目指して行きたいとした。

この学部増設認可申請をうけて、文部省は翌1962年1月、「大学学部の増設について」という通知を発した。文学部日本文学科40名(入学定員)・中国文学科40名(入学定員)、経済学部経済学科150名(入学定員)という大学増設については、「認可になりましたが、下記の事項に留意のうえその実施に遺漏のないように願います」とした。その学部増設認可への附帯事項は、「一 建築中の建物は予定計画とおり完成すること。二 図書は、一般教育および専門教育関係(中国文学関係を除く)ともさらに整備充実すること。三 教員組織については、経済学部においては中堅教員を増強すること。四 研究費および図書費をさらに増額すること。五 機械器具類はさらに整備充実すること」というものであった。さらに、本学の資産関係についても、私立大学審議会から前記の附帯事項に加え、「後援会活動による募金状況を明らかにすること(例、奉加帳・申込書)」が指摘されたのである。

### 経済学部経営学部の増設と経済学部の入学定員の変更

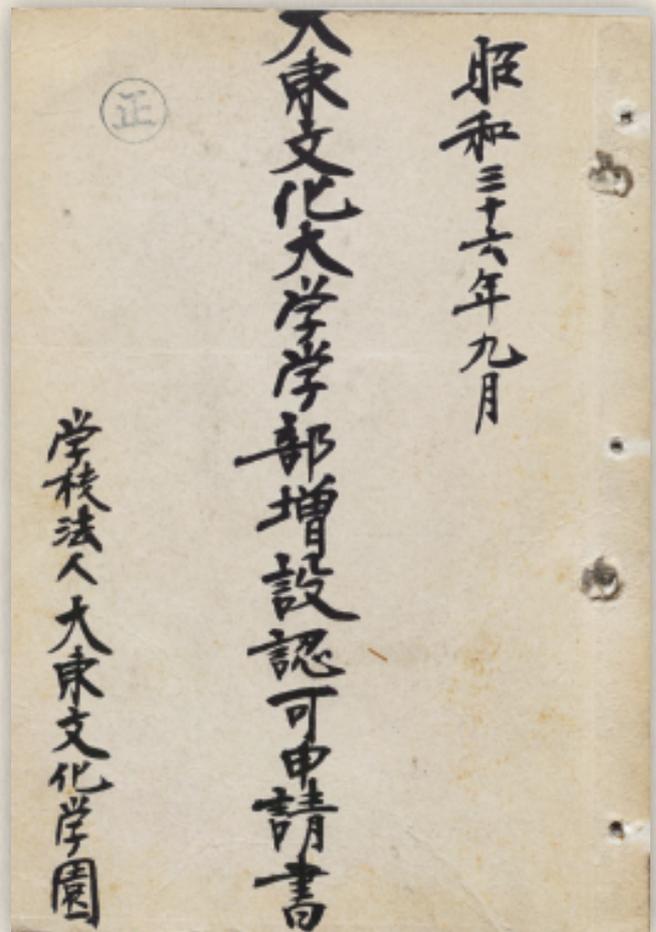
また1962年6月、中村佐一(経済学部長)・古屋美貞・井上貞蔵・友安亮一・小林元らの関係教授を交えた、経済学部学科増設委員会(第1・2回)が開催され、「経済学部としては別紙資料[略]のとおり最少の経費をもって、相当の結果を上げ得ると思料せられるので、[昭和]38年度より経営学部の是非増設されるよう理事会へ要請する」と決定した。同時期、文学部でも学科増設委員会が開かれ、学部増設に関して「文学部としてはなるべく近い将来において英文科の増設を要望する。なお美術学部の増設についても要望あり」として、理事会に要請したいとしている。

1962年6月、文・経済両学部教授会(出席教員19名/定員27名)において、「学科増設ならびに入学定員に関する件」として、中村佐一経済学部長が議長となり、議長から議案の説明がなされ、参加教員ら全員異議なくこれを承認した。経営学部増設の内容は、「一 経済学部経営学部入学定員100名・収容定員400名。二 右の増設にともない、経済学部の定員を左のとおり変

更する。経済学部経済学科（旧）入学定員150名、（新）入学定員100名、（旧）収容定員600名、（新）収容定員400名、計経済学部（新）入学定員200名・収容定員800名。三 教員組織 現在の教員組織を考慮して大学設置基準にしたがい、年次計画により4年間に充実する。四 増設届出は十分検討のうえ整備して、9月30日までに文部省に提出する」というものであった。経営学科の増設とともに、経済学科の入学定員50名の削減を合わせて届出ることとしたのは、新規採用の教員人件費を最小限にとどめ、相応の効果を上げたいという狙いであった。

1962年7月、理事会において、金子昇事務局長から議案「経済学部経営学科を増設することについて」の詳細な説明がなされ、協議の結果、教員人事でとくに新たな補充を行う必要が生じないならば、原案どおり承認するとした。なお高田眞治文学部長と中村佐一経済学部長の連名でまとめた「経営学科増設の目的」という書類には、「経営学科を増設せんとするゆえんは、本学の建学の精神を体得し、民族の主体性を堅持した穏健中正な、立派な経営者となるべき国民を育成し、国家社会の福祉と進展に寄与せんとするものである。なお本学科を増設することによって現在の経済学部が、一応学部としての形態を完成することになり、ひいては今後飛躍的に学生を多数収容し得る態勢が整うわけである」とのつよい期待が込められていたのである。

1962年9月、南條徳男理事長は文部省に「大東文化大学経済学部経営学科増設ならびに経済学科学生入学定員変更届出書」を提出した。この届出書では、経営学科増設等の事由について、「現代社会において経済学部の卒業生につよく要望されることは、実社会に出て直ちに役立つ経営に関する諸学を身につけることである。本学において経営学科を増設せんとする理由は、経営学の蘊奥を究め、その応用を研究し、もって人格の陶冶と知識の涵養に努め、建学の精神に則って、民族の主体性を堅持した穏健中正な立派な経営者となるべき国民を育成し、国家および社会の福祉と進展に寄与せんとするものである。なお経済学科の入学定員を変更する理由は、経営学科の増設にともない、収容すべき施設その他を勘案したものである」と明記された。さらに、経営学科の設置認可申請にあたっての「将来の計画」として、「一 学部および学科組織等に関すること：将来施設設備ならびに教員組織等の充実をはかり、文学部・経済学部とともに大学院を設置する。二 学科目または講座教員等に関すること：将来年次ごとに専任教員数を増加し、併せて



学科目・講座内容等の充実をはかる。三 校地・校舎：(1)校地は現在所有の約8090坪の隣接地を、借用地8000坪の借用期間5年間満了時までには買取拡張する予定である。(2)校舎は現在学生数においては十分であるが、学生数の増加を勘案して増築する。四 図書・標本・機械器具等に関すること：(1)図書は基準をはるかに上回っているが、主として内外国の専門図書の増冊をはかる。(2)標本・機械器具等に関しても、学科目または講座ならびに学生数を勘案しつつ年々補充していく」という方向性を掲げたのである。文部省は1962年12月、この届出書の認可通知で、「一 建築中の建物は予定どおり完成すること。二 学生定員を守ることに」について、「改善または充実のうえ実施されるよう願います」と回答したのであった。

# 大東アーカイブス活動記録

2025年4月～9月

4.25	学内所蔵画像（デジタルデータ）移管
5.8	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会（オンライン）
5.19	WG会議
6.3	WG会議
6.10	企画展打ち合わせ
6.17	木下成太郎関係寄贈資料受領
6.26	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・部会総会（於：青山学院大学）
6.30	百年史編纂委員会（第一回） 歴史資料館運営委員会（第一回）
7.3	事務局長インタビュー（百年史下巻編纂のための聞き取り調査）
7.10	企画展打ち合わせ
7.17	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（於：立教学院）
7.28	企画展打ち合わせ（米朝事務所）
8.8	企画展打ち合わせ（施設業者）
8.13	WG会議（下巻草稿読み合わせ）
9.3	『大東文化大学百年史』下巻打ち合わせ（定例会）
9.25	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会（オンライン）
9.29	企画展打ち合わせ

## 『大東文化大学史研究紀要』 第11号 原稿募集

『大東文化大学史研究紀要』第11号に掲載する原稿を募集します。投稿締切りは2026年12月中旬を予定しております。投稿を希望される方は、2026年10月末日までにこちらのメールアドレスへお知らせください。ご質問等も随時受け付けております。**エントリー（投稿）・そのほかに関する問い合わせ先：**  
**archives@ic.daito.ac.jp**  
「投稿規程」詳細については、百年史編纂サイト「継往開来」（<https://www.daito.ac.jp/100th/bulletin/>）でも公開しておりますので、ご確認くださいませようお願い申し上げます。積極的なご投稿をお待ちしております。



## 資料寄贈ご協力のお願い

大東アーカイブスでは、本学関係資料のご寄贈をお願いしております。学園沿革史に関わる資料がございましたら大東文化歴史資料館事務室（渉外連携室内）までご連絡いただきますよう、よろしくごお願い申し上げます。

●大東文化歴史資料館事務室（渉外連携室）

電話:03-5399-7403

E-mail:archives@ic.daito.ac.jp

*Ex Oriente*

『Ex Oriente』（エクス・オリエンテ）は、かつて大東文化協会比較研究部が機関誌として1925（大正14）年4月に創刊した雑誌名でした。英仏独の3ヶ国語のうち、いずれかで執筆された論文のみを掲載し、欧米諸国へ向けて、東洋文化に関する最先端の研究成果を知らせたいとの目的で発行された同誌は、当時わずか3号のみの発刊（1988～93年に東洋研究所が続号として4～6号を発刊）となりました。以降、幻となっていた雑誌名を大東アーカイブスで受け継ぐこといたしました。

## Ex Oriente | Daito Archives Newsletter Vol.39

発行:2026年2月28日

編集発行:大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）

〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10 大東文化大学徳丸研究棟3階

TEL 03(5399)7646 FAX 03(5399)7647

E-mail : archives@ic.daito.ac.jp:

URL : <https://www.daito.ac.jp/100th/archives/>